

はなむけの言葉



総長・学長

ながい
永井 かずゆき
和之

卒業生諸君のこれからの人生に幸多きことを切に願う。

卒業する年がどのような経済状況であるかを卒業生は選ぶことができない。しかし、そもそも人間、生まれた年を選ぶことはできない。そうしたあるならば、どんな状況でも人は精一杯努力をし、その環境の中で人生を充実させていかなければならない。そして、これも人生としみじみ振り返ることができる日が必ず来ることを確信している。

本年卒業する学生諸君の多くは、

そのまさに社会への出発に当たって、就職難という、始めから大きな試練を味わった。このような試練は、人生の中でどこで遭遇するかという時期が異なるだけで、長い人生において絶対ありうることであると思う。その中でも、人の多くは、自己の労働力・能力をもって社会で生きていかなければならない。その人のできる限りの挑戦をするしかない。挑戦しなければならぬ、そんなチャレンジをする人になって欲しい。

百二十五周年を迎える本学の長い

歴史の中には、多くの試練の中に卒業していった先輩達がいる。そんな先輩に負けずに頑張つて欲しい。また、卒業後の試練の中で、大きな足跡を残していった先輩達がいる。

そんな先輩達の何人かをここに紹介したい。まず最近、中国からの留学生で1905年に本学を卒業された黄遠生氏についての調査・資料収集に中国から一人の研究者が来られた。黄遠生氏は当時の新生中国誕生の揺籃期において言論の自由などを論じ、そのためにサンフランシスコで30代始めに暗殺された方だそうである。私も大学関係者も存じ上げなかつた先輩である。言論の自由・学問の自由といえば、本学の誰もが知っている長谷川如是閑先輩がおられるが、素晴らしい言論人が評価されそうで誇らしい気持ちになる。

また卒業生に、是非読んで欲しい本がある。昨年は、東条英機と闘つた裁判官として吉田久裁判官が紹介された清永聡著『気骨の判決―東條

英機と闘つた裁判官』（新潮社、後にNHKでドラマ化）を紹介したが、本年は門田隆将著『康子十九歳 戦禍の日記』（文藝春秋刊）を紹介したい。この著者も本学の卒業生であるが、この本には中央大学予科の学生達が登場する。その中には学員体育会会長である高木丈太郎先輩もおられる。また、本学学生歌ともいふべき惜別の歌の誕生秘話が窺える箇所もある。しかし、それ以上に、太平洋戦争という状況下の勤労奉仕に動員されているという中でも、一日を精一杯誠実に生き、社会の現実に正面から向き合つた先輩達が、そこにいる。そんな先輩達を知つて欲しいと思う。

このように君たち卒業生が歩む道は色々であるが、中央大学は、君たち卒業生が、この本学の学生として学生生活を送つた誇りをもって、これからの君たちの人生をおくつて欲しい。そんな願いを込めて、全ての卒業生にエールを送る。